

婦人と子ども



安井河野二氏を送る

本會々員、女子高等師範學校教授安井哲子、東京高等師範學校訓導河野清子の二氏は、暹羅國皇室の招聘に應じ、彼國女子教育の經營に任せんがため、去月二十三日を以て、遠く彼國に向つて南航の途に上られた。數多き我が女流教育家の中で、特に、二氏が其選に當られたのは、二氏に取りて最も名譽な事で、はた二氏か此名譽の招聘に應じて、奮然として立たれた勇氣に向つては、吾人は滿腔の敬意を表すると同時に、由來纖弱優柔兎角安逸に耽りて爲すなしとせられた我が國女流の中より、此勇氣ある大膽なる二氏の如きを出すに至つた所の我國氣運の發展を祝せねばならぬ。

思ふに安井哲子氏の才學は、世既に定評あり、女子高等師範學校を卒業して間もなく文部の留學生となり、數年の間英國に遊んで、深く教育學の蘊奧を極められたのは勿論、豊富な思想と、卓絶せる識見と、而して高潔なる品性とは、實に歸朝後三年間煌々として我が女子教育指導の燈明臺となりて光を放たれた所である。蓋し方今我が國女流教育家を以て、自ら任じ人も許せるもの恐らく少くない。然も其學識に於て、はた其品性に於て、氏は確に第一流に推されなければならぬ。河野氏は、晩近の卒業ではあるが、在校中既に活潑敢爲の風あり、將來有爲の器として頗る囑望せられた人で、高等師範學校に訓導となつてからは、嘖々として良教員の名を得た。沈重なる安井氏と、敢爲なる河野氏と、實に二氏の行、よく我國女流の實力眞價を海外に向つて發表する所の代表者としての名譽ある重任を果たし、よく彼國皇室の期望を満足せしめられる事が出来ると思ふ。

かくて、二氏が孜々として彼國女子教育の經營に任せらるゝ曉には、由來蒙昧野蠻、文化の何たるを知らざる此南亞細亞の一國民をして、茲幾數年の後に至り、よく燦然たる文化の光に浴せしめ、彼の國家をしてよく世界の進運に伴ふ國勢の擴張を遂げしむることが出来ると思ふ。茲に至つて、二氏の光榮は、實に世界に向つて誇るに足るべきである、のみならず、尙且外に向つては二氏の經營の成績はやがて直ちに彼國をして、否な寧ろ世界列國をして、我國の眞文化——我國女流の實力眞價を認識せしめることとなり、之に由りて我國勢の膨脹發展に向つて資する所、甚だ大なるものがあらうし、内

に向つては、二氏の大膽勇敢なる遠行は、兎角引き込思案勝ちなる我國一汎の女流を刺戟して、大に進取の氣象を煥發するは勿論、日々機械の如くに同一事を繰り返すの外、安を求め逸に流れ、眼光豆の如く徒に、豆粒大の場面にのみ躊躇することを知つて、他に活動の舞臺の無限に開けつゝあるを知らない、言はゞ萎靡沈滞せる我國一汎の教育界を醒覺するには、大に功があることと思ふ。

然しながら、成敗もと天に在りて、必らずしも功を一時に期することは出来ない。殊に、氣候炎熱風土甚だ健康に適せざることゝあらうし、且つは種々なる人事上の關係の紛糾解さ難きものゝあらう。成効に急ならんとして反つて敗を見るは、珍らしくない、二氏たるもの幸に自重自愛、徐ろに成効の計を劃せられんことを望むのである。

去月二十三日、吾人が東京灣頭、別離の涙を以て遙に南海に航する二氏を送る時に當り、暹羅灣頭、メナム河に近き磐谷府の一部には、遙に希望の眼を上げて、北方の空を眺めつゝ、二氏の一行を待たれて居るのであらう。

安井哲子の君を送る

松村 ひさ

時將に新春一月二十三日、東の空いまだ白まず、星は鼠色の雲の中に眞珠貝をちりばめたらんやうにきらめき渡れり。全都の家眠り未ださめず、行きかふ人もなき中に、小石川なる砲兵工廠の夜業の物